

(*はリポジトリ非登録箇所を示しています)

第11回経験交流会

女子学生のキャリア支援を考える

講師：日本女子大学 永井暁子氏

2010年10月27日

第1部 女性の働き方、生き方とキャリア教育

司会（六車）：

それでは時間になりましたので、第11回経験交流会を開催させていただきます。国際教養学部では、旧教養部時代から「よりよい授業を求めて」というスローガンのもと、教員に授業内容や方法を公開していただき、教育経験に基づいて意見交換を行うことで個々の教員の授業改善につなげていこうと経験交流会を開催しております。

この経験交流会は、発足時より全学の教員にご参加いただけるように案内させていただいておりますし、最近では講演者としてご報告いただいております。

また、今年で3年目となります、名古屋大学・南山大学・名城大学と中京大学で構成される「FD・SD コンソーシアム名古屋」の後援事業として3大学の先生方にもご案内させていただいております。

今年は国際教養学部の第1期生が3年生となり、秋から就職活動を始めています。第1期生の就職支援という観点からも、その約8割を女子学生が占めているということからも、今年は「女子学生のキャリア支援を考える」といったテーマとなりました。

国際教養学部では、初めて担当した学生が初めて就職活動を経験するという、未経験の事柄のため、今年は思い切って学外から先生をお呼びすることになりました。

そこで、日経ウーマン online に掲載されておりました、『『女性の4人に1人が結婚できない』時代に』を読んで、ぜひ日本女子大学の永井暁子先生からお話を伺いたいと連絡を取りました。また、永井先生には、教員だけではもったいないので学生にも参加してもらえるように、第一部を学生対象とした「女性の働き方、生き方とキャリア教育」と、第二部の教員を対象とした「女子学生のキャリア形成教育の現状と課題」の二部構成で講演をお願いしたいという依頼をし、快くお引き受けいただきました。

さらに、国際教養学部の学生からは、すでに「ライフコース・イメージに関するアンケート」（付録参照）にご協力いただいております、その集計結果とあわせて今日はご講演いただけるということで、私も今日の話非常に楽しみにしております。

ではまず、第一部をご講演いただいたあと、質疑応答、休憩をはさんで第二部のご講演、質疑応答の順に進めさせていただきます。

それでは、学長にお越しいただいておりますので、一言ごあいさつをお願いしたいと思います。

北川学長：

今日は第11回目の経験交流会ということで、日本女子大学の永井先生にお越しいただいております。どうもありがとうございます。

先生の大学は生田にあります。私は登戸に住んでいたものですから、非常に懐かしい思いがいたします。

さて、今日このようなテーマで経験交流会が開催されますが、学長のあいさつとのことですが、私が考える女性について少しお話してごあいさつに代えたいと思っております。

まず一つ目は、私の中学3年生の時の経験になりますけれども、いわゆる高校受験では第1志望は男女共学の公立高校でありました。それで、すべり止めと言ってはなんですが、こちらのほうは男子校なのです。「もし落ちたら嫌だな、女性のいない世界に行くのは耐えられないな」という感じでおりましたのを強烈に覚えております。その時に、「世の中は、男性は女性を意識し、女性は男性を意識して生きていくものだなあ」と思ったわけです。これを15歳ぐらいで思ったということを友達に言いますと、「ずいぶん早熟だ」と言われました。私が早熟かどうかは知りませんが、いわゆるジェンダーの走りのことを、その頃に感じたのかと思っております。これが一つです。

二つ目は、体力差についてです。私は体力科学、中でも運動生理学が専門なのですが、一般的に考えれば、男女の体力差は男性を1とすれば女性の体力はだいたい3分の2です。しかし、たとえば筋力です。腕の屈曲の筋肉の太さを測り、実際に力が出ている様子を見ますと、筋肉の断面積1平方センチメートルあたりの出る力というのは、男女差はなくて、だいたい6キロから7キロです。

これは、ほかの能力もそうございまして、たとえば走る能力を考えてみても、女性はどうしても体が小さく体脂肪が多く男性よりも成績が劣るのですが、理論的に体脂肪を取り去った値で比較しますと体力には男女差はほとんどないのです。ですから、体力科学を専攻する立場から言えば、生物学的な男女差はないと強く思っているわけです。

ただ、ちょっと細かいことを言いますと、赤血球の数は女性のほうが1割ほど少ないとか、そういったことはありますけれども、大まかに言って皆さんが考えるような男女差というのは、体の構成単位で考えれば、体力的に、男女は同じ勝負ができると思っております。

そこで、いつも思うことは私の母親でございます。私は名古屋の中区の大須で育ちました。家は味噌とか醤油とか酒とかを扱う小売屋でしたが、今はこんな店はほとんどつぶれておりませんが、お袋の働き方を見て育っております。

確かにその店は、親父が起こして自分で努力して店を持って結婚して、我々子供を育ててくれたのですが、子ども心に思い出すのは、親父が働いていたのはほとんど記憶がなく、お袋ばかりなのです。それで、親父はもう50歳で隠居しておりました。私は今、65歳なのですが、まだ働いております。50歳で隠居して、死んだのは87～88歳ですから、人生の半分近くを遊んで暮らしたわけです。お袋はと言いますと、これも87～88歳まで生きておりましたけれども、亡くなる半年前位までまだ店に出て働いておりました。そういうのを見ますと、先ほどの体力とのことも絡めて、やはり女性のほうがよく働くのではないかと、正直強く思っております。

これはジェンダーや、いろいろな絡みも社会的な立場の違いもあるのですが、私はよく世間で考えるような男社会というのは、身を持って感じてはおりません。高校の同級生でも、大変優秀な女子学生がたくさんおりましたので、どうして彼女たちが家庭に入ってしまう

のかというのが残念ですが、彼女たちの生き様を見ていると、それも楽しそうだなという気もいたします。

本日は女子のキャリア教育という、極めて現代的な話題で今回の経験交流会が開催されますが、私のこうした経験からすれば、体力的には男女差はなく、ただジェンダーという意味合いでは差があるという話もあろうかと思っております。内容に絡むような絡まないような話でございましたが、これで本日のごあいさつとさせていただきたいと思っております。どうもありがとうございました。

司会：

ありがとうございました。では講師の先生の紹介をさせていただきます。永井暁子先生は、1991年に北海道大学・大学院文学研究科修士課程を修了され、文学修士を取得。その後1993年に東京都立大学大学院社会学研究科修士課程を修了されて修士（社会福祉）を取得。そして東京都立大学大学院社会学研究科博士課程を単位取得満期終了されています。現在は日本女子大学人間社会学部社会福祉学科准教授で、家族社会学を専攻されています。

では永井先生、よろしくお願いたします。

永井先生：

ただいまご紹介いただきました永井と申します。よろしくお願いたします。

先ほどの学長の北川先生の話非常に興味深くお伺いしました。生物学的な差はないと言い切っていただけるのは、すごく斬新だなあと感じています。

私自身、中・高から北海道大学時代までずっとスキー部におりました。今は身体の3分の1近くが体脂肪なんですけれど、昔はもう少し筋肉質で運動をたくさんやっておりました。大学院に行くまでは脳みそよりも筋肉ばかり鍛えておりました。

今は、ジェンダー論を授業で教える時は、男性と女性の生物学的な違いというのは分布の山（例えば正規分布の中央値）の違いであるという、分布の山があるとしたら、山がずれているという、二分法ではないのですよという話をするわけです。それで、体力の違いなども、自分がスキーをやっていた時は、同じスキー部の男子よりは力がないけれども、教室の中の1番弱い男子よりは腕相撲が強いというようなところがありまして、だいたい70キロぐらいの男性だったら楽に持ち上げることも昔は出来たなどという例を出しています。とはいえ、今は3歳の息子を持ち上げるのにヒーヒー言っております。

そんなこともあって、男女の違いというものを大学の時代に疑問を感じるようになって、家族社会学という中で、ジェンダーの問題などに取り組んできました。

本日は、「働き方とキャリア形成」という、ものすごく大きな題目なんですけれど、私がお話できるのはすごく小さな部分で、家族社会学などをベースにしたお話をさせていただきたいと思っております。本当に小さなテーマになってしまうかもしれません。

まず、「ライフコースとは何か」ということを考えていただきたいのですが、ライフコースを日本語の漢字に直すと「人生航路」となります。その中でまたキャリアとは何か、ということですね。

まず、時間について考えてみたいと思っております。時間というと刻々と時計が動いている時

間をイメージしますが、視点を変えると幾つかの時間があります。

たとえば一つの捉え方としては、「歴史時間」という捉え方です。何年に自分が生まれたか、そしてどういう世代であるかということです。何かのライフイベントが起きたタイミングが同じ人のグループのことを、「コーホート」とか、「コホート」と言います。たとえば、「1960年代出生コーホート」というと、1960年代に生まれた人のグループを指しますし、「1980年代結婚コーホート」というと、1980年代に結婚したグループを指します。ある個人がどういう時代に生まれて、どういう時代に人生のどの時期にいたかを考えること、歴史上のどんな時間が流れていたかということを見るのが「歴史時間」というものです。

ですから同じ20代の過ごし方といっても、北川先生の過ごした20代と、皆さんの過ごしている20代では当然違うわけですね。それは何が違うかということ、その後ろに流れている歴史の時間が違うわけですね。簡単に言うと、世代の差ということです。

次に「生涯時間」というのが一般的に考えられている時間かと思います。これは加齢により流れる時間で、1歳、2歳、3歳、毎年歳をとっていく時間です。

それとともに大事なのが、家族社会学で扱う「家族時間」と言われているもので、家族の形成から解散に至るまでの時間です。この解散は、離婚ということもありますけれども、家族のメンバー、配偶者の死亡によって解散するというように当初考えられていました。家族の時間、家族としての時間の流れ、家族としての発達段階をどう経ていくか、その時間の流れのことを指しているわけです。

こういった歴史時間、生涯時間、家族時間といったような時間の流れを私たちは持ちながら、人生行路を歩んでいるということにもなります。ですから、たとえば、同じ歴史時間の中に過ごしていても、生涯時間がそのどこに当てはまっているのか、あるいは、家族時間がどう当てはまっているのかによって、それぞれの人のライフコースは随分違うということになるのですね。

ここで言いたいことは、「キャリアとは何か」ということです。キャリアというと、一般的に職業的なキャリアのことをイメージされる方が多いかと思います。「職業キャリア」というのは職業生活における経験の積み上げのことを指すわけで、こういった職業訓練を受け、こういった職業経歴があって、どんな役職、どんな職種の経験を積み上げて来たかといったことがキャリアとしてとらえられるかと思うのですけれども、キャリアには、それともう一つ「家族キャリア」という考え方もあります。

もちろん、結婚を必ずしなければいけないということではないのですけれども、皆さんにアンケートを取った結果としては、多くの方は結婚したいという希望を持っていらっしゃるようでした。そういったことからいえば、家族キャリアというのは、自分が家族を形成していく、家族生活における経験の積み上げということになります。

もちろん、自分が生まれ育った家族の中で子ども役割というのも家族キャリアとして入ります。その子ども役割から、自分が妻役割や親役割といったいろいろな役割を経て経験を積み上げていくということが家族キャリアです。

この家族キャリアといったことも自分のライフコースを考える時には大変重要なことになるということになりますので、キャリアを考える時には、仕事だけではなくて家族生活

の中で自分がどういうキャリアを積んでいるのかということ、女子学生だけでなくとりわけ男子学生の方にも考えていただければいいなというふうに思います。

まず最初に、学生の皆さんに回答していただいたアンケートの結果についてご紹介していきたいと思います。

アンケートは200人の方にご回答いただきました。男性が42名、女性が158名の200名でした。その内1年生が1番多くて106人、2年生16人、3年生78人です。男女の回答の違いなどを見ていきますけれども、性別と学年の間に偏りはなかったもので、取り立てて3年生の男子学生が多いので3年生の特徴がよく出ているといったようなことはないと思いますので、単純に男子学生と女子学生の意見の違いというふうに見ていただければいいかと思います。

まず、「ライフコースにはどんな希望があるのか」についての結果で、1番左側の青いところは結婚をして、出産をして、就業を継続しているという部分です。それを希望しているのは、女子学生では約4割になります。男子学生に対しては、「妻にどういうライフコースを希望しますか」ということなのですが、男子学生のほうが就業を継続してほしいという希望が高く、55%ということになります。

次の赤い部分ですけれども、これが「結婚もするし、出産もして離職する」という専業主婦です。これは、男女ともにほぼ同じぐらいの割合で、1割程度ということです。女性で1番多い割合を示しているのは、「結婚・出産を経た後離職して、子どもが手を離れて子育てが一段落したら再就職する」です。一般的な再就職パターンを希望している学生さんが非常に多くて、4割以上を示しているわけです。

それに対して、男子学生でそれを希望しているのは2割程度にしか過ぎません。男子学生のほうは妻の就労継続を希望していて、当の女子学生のほうは一たん離職後の再就職を希望しているということが分かります。

この調査結果をこの学部の特徴とか、この大学の特徴であるというような可能性については全く分からないので、素直にこの数字を読んでいますと、これまでに私のゼミ生が卒論の調査として首都圏の大学で行った調査とはかなり異なっています。法学部、経済学部の男子学生は、割と専業主婦を望む人もいるわけです。社会科学系の中でも社会学や社会福祉学科のような社会福祉学系の学部ですと比較的に近い、この男子学生の回答に近い傾向が出てきますので、人数が少ないので偏った結果になる可能性はないわけではありませんが、それほど大きな、びっくりするような違いではなくて、社会科学系の中では法・経を除くと、ほかの調査でもこういう傾向と似ています。

次に、「結婚希望年齢は何歳ですか」というのを聞いたものです。赤が女子で、青が男子になっています。

ちょっと話題がずれますが、調査票上で最初に性別を聞く時に「1. 男性」、「2. 女性」と書きました。また、調査結果を示す時にも、青を男子にして赤を女子にしています。非常にセクシズムというか、「何で男子を1にして先にするんだ」「なんで男が青なんだ」ということは、私も20年ぐらい前、大学院生の時にも思っていました。それで、大学院生の時に助成金を取って家族の範囲に関するアンケート調査を行った際、1を「女性」にして、

2を「男性」にしたことがあったのですね。そうしたら、同性愛カップルが1割以上出て来てしまっていて、やはり人は1を「男性」、2を「女性」というふうに強く思い込んでいるので、無理に変えると誤答といいますか、間違えて回答するということが非常に多いということが分かったわけです。非常にジェンダー色が強いアンケートの設問の配置になっていたり、グラフの色になっているのは重々承知しているのですが、無理に変えても間違えるということを身に染みて感じましたので、こういう結果、こういう色づかいなどになっています。

話を戻しますと、最初の山が25歳です。男性ですと2割近く、女性ですと4分の1近くの方が25歳で結婚したいということです。それが26歳、27歳、28歳とぼちぼち続き、29歳というのは一旦少なくなって、また30歳に山があります。つまり、男性は30歳、女性は25歳にピークが来ている状態なのですね。感想はまた改めて言います。

では、「初産の年齢は何歳を希望しますか」、「何歳で子どもを持てると思いますか」という質問に関しては、やはり、男性・女性共に28歳と30歳のところに山が来ています。結婚年齢と出産年齢等を引いた値、「結婚してから何年で子どもを持つか」について引き算をしてみますと、男子学生の多くは結婚2年後や3年後の出産を予想して、女子学生の方は43%が結婚翌年の出産を予想しています。

また、男子学生、女子学生共に結婚した年に出産を予想しているというケースも1割ぐらいいましたので、結婚するとしたら、「できちゃった婚」、「寿婚」を想定しているのでしょうか。解釈についてはインタビューしてみないと分からないのですが、こういう数字になっています。

また、「希望の子ども人数は」と聞いてみたところ、希望するライフコースをたずねた際には、ほとんどの学生さんが子どもを希望していたわけですが、それでも、「子どもがいないかもしれない」というふうに考えたのが、「子ども人数0人」という回答は男女共に6%になります。また、「子ども1人が希望」というのは非常に少なく、「子ども2人」というのがやはり圧倒的に多かったということです。それで、「子どもが3人以上欲しい」という方は男子学生で17%、女子学生で21%と、やはり同じぐらいの数字になっています。

再就職時の子どもの年齢について聞いたところ、これは結構皆さんの回答が異なっていて、まず最初の山は1歳なのですが、それでも、「1歳の時に」という回答から、一番高いのが「6歳の時に」という山で、つまり子どもが小学校に上がったということでしょうか。それから13歳や16歳というところに山が来ているということで、子どもがまず幼稚園に入ったら、子どもは小学校に入ったら、子どもが中学校に入ったら、というふうに考えて、おそらく回答したのだと思います。

皆さんの回答から、「最初に子どもを産むとしたら何歳か」という予想と、「子どもは何人欲しいか」というのを掛け合わせて1人目から2人目が2.5年で、だいたい何歳ぐらいに産み終わるかというのを計算してみますと、だいたい30歳のところが一番多いわけです。これは女子学生のほうに聞きました。

男子学生ですと妻の年齢が多分分からないと思いますので、女子学生の方の回答からみますと、一番高い山が30.5歳で、だいたい30歳～31歳の間ぐらいになります。それ

と32歳というところで、30歳とか32歳に子どもを産み終わるという予想をしていると、結果的に皆さんの回答から推測できるわけです。

それから、「子どもが何歳になったら手が離れると思うか、再就職しようと思うか」という質問を使って再就職希望の人だけで計算してみますと、だいたい子どもの手が離れるというのはご本人が31歳～34歳、35歳というところが前半の大きな山になっています。それから30代後半のところにちょっと山がきているという状態です。

それから見て、再就職パターンの方ですと、子どもの最初の出産の年、本当は出産よりちょっと前に仕事を辞めていると思いますけれども、それから再就職までの期間を出してみますと、前半のほうで1番高いのが8.5年というあたりです。それから、その隣が5.5年というかたちになっています。

前半の部分で少し山はあるんですけども、それ以降は広く分布していて、10年以上という人も人数としては結構多いということです。

以上がアンケート結果の概況です。学生さんのライフコース・イメージについて感想を申しますと、希望する結婚年齢が低いことに実は非常に驚いているのです。今まで私が女性福祉論などの授業科目で女子学生にライフコースについて聞いた場合には、もうちょっと違う聞き方をしましたけれども、30歳前後で結婚しようと思っている人が多くて、女性で25歳のところに山が来て、男性で30歳のところに山が来るというのはあまりなかったのですね。何か学生さん方の眉間にしわがよっているようですけども、だからどうだということはありません。

印象としては、すごく結婚年齢が低いなあと思ったということです。というのは、私は1965年生まれで、日本の少子化・晩婚化・晩産化・未婚化を牽引しているといわれている世代なのです。確かに、小学校の時の友達で出生率を計算しても、日本の出生率みたいなものになりますし、さらに、北大の同期の友達で出生率を出すとものすごく低くなってしまいますし、未婚率も非常に高いわけです。

私が皆さんぐらいの時によく言われていたのは、ジェンダー論の授業などではよく聞くのではないかなと思いますけれども、「女性はみんなクリスマスケーキ」、「25日を過ぎると新しいイチゴに取り替えてももう売れない」というふうに言われていました。つまり、女性は24歳か25歳で結婚しろというふうに言われていたわけです。でも、皆結婚しなかったですし、私も今はやりの高齢出産で、ものすごく晩産です。

それで、男性の場合はどのあたりで結婚していたかといいますと、男性の結婚適齢期といわれていたもの、あるいは結婚の圧力がかかっていた年齢は30歳で、「30歳までに結婚しないと出世できない」と言われていました。

男女の賃金カーブのグラフを見れば分かると思いますけれど、男女の賃金は20代ではそんなに大きく違わないのですが、30歳になるとグッと男性が上がり差が出てくるわけです。とはいえ、最近では男性の賃金の伸び率も低くはありますが、男性が上がるのに対して女性が上がらないというのは、昇進が違うからだというふうに言われています。つまり30歳以降というのは昇進していく可能性があるわけです。そのときに私の世代は、昔は皆が結婚する時代だと言われていたので、男性でも30歳までに結婚していないと「何か人格的に問

題があるんじゃないか」というふうに疑われ、昇進にひびくというふうに言われていました。また、「会社人間」というよく聞く単語は、会社に全てのエネルギーを注げるように、家庭でいろいろなお世話をしてくれる妻を持つことが前提で、結婚したうえで会社に大きく貢献できるというふうに考えられていたのです。

このように男性は30歳までに、女性は24～25歳で結婚というふうに言われていたということなのですが、今回のアンケート結果はその時代のような結婚希望年齢だったので、「低いなあ」というふうに思ったわけです。

もうひとつの印象としては、子育て後の再就職パターンを見ていると、また、離職期間の長さなどを考えると、パートでの再就職をイメージされている方が多いのではないかなというふうに思いました。

それで、子育て後の再就職パターンや結婚年齢などは、親御さんの影響が大きいのだろうか、親御さんと同じようなライフコースをモデルに言っているのだろうかというふうなイメージを持ちました。皆さんに直接お話を伺っていないので分からないのですが、数字や回答から見るとそういったイメージを持ちました。

また、意外と、と言ったら失礼なのですが、特に日本女子大の学生と比べると、堅実なライフコース設計ではあるわけです。希望するライフコースパターンと年齢の構成があまり乖離していないのですね。つまりもうちょっと詳しい形で回答してもらっているのですが、何歳で結婚して、何歳で子どもを産んで、何歳で再就職してというのが、日本女子大の学生の回答では、もうちょっとズレが大きくなるわけです。

それで、ここで言いたいことは、結婚年齢が重要な前提となっているということです。「結婚の話聞きに来たんじゃない、結婚相談所じゃないですよ」と言われるかもしれませんが、これは今日話すこととしては一番重要で、みなさんに「結婚してください」とか、「子どもを産んでください」とか、「少子化をどうにかしましょう」と言うわけではなく、ライフコースを考える際に重要な影響を与えるのが結婚年齢だということなのです。

私のところの日本女子大の学生がライフコース・イメージに数字を入れていくと、最後はズタズタになるのです。結婚年齢の希望は30歳くらいなわけですが、30歳で結婚するということからスタートすると、ライフコース全体がズレズレになって、キャリアがちぐはぐになってしまうわけです。

ですから、皆さんのお手もとの資料の2番目の、「生涯時間」と「家族時間」のところの「何歳」というところを見ていただいて、たとえば住宅ローンですと、住宅ローンを何歳までに払い終わらなければいけないかというのと、だいたいの場合60歳までに払い終わらなければいけないので、30歳までに住宅ローンを組まなければいけないわけです。そうすると30歳までに結婚しなければ、ということにもなります。また、再就職するのだったら40歳までに再就職を始めないとパートでもなかなか見つからないということになると、40歳で再就職という数字を入れていったり、フルタイムでの仕事を再就職で探すのだったら30代前半じゃないと見つけにくいということです。

まずそういった条件、限界といいますか、「ここまでに何かしないと、その条件に合うものは当たりませんよ」、というものを入れてみるわけです。また、その出産というのは何歳

までできるのかというのもその図に入れていってもらいます。

次に、まず結婚を何歳でするかというところから考えて、徐々に逆行して、ではここで出産したら子どもが何歳になって、というのを図の家族時間のところに入れてみていただくと、再就職パターンを選んだ場合、ここの学生さん方は結婚年齢さえうまくいけば、そして、そしてすぐに出産することができれば、割とスムーズに進むといえますか、あまり矛盾のないライフコース設計となるのですね。

それで、うちの日本女子大の学生は、30歳のところで結婚としているので、その後、全部ズレズレになってしまうわけです。つまり、再就職のタイミングが45歳ぐらいになってしまったり、子どもを3人欲しいといっても、30代に入ってから産み始めて3人産めるのかしらとかといったことです。

しかし、ここの学生さんの場合は、比較的結婚年齢が早いので、再就職のタイミングなどに無理が生じていないのですが、無理が生じていない前提が結婚年齢だということです。それで、改めて25歳という年齢がどういう年齢かというのを考えてみたいのですけれど、卒業するのが22歳で、それから3年で結婚ということになるわけです。もちろん、結婚式をしなくてもいいとか、いろいろだと思えますけれども、多くの場合は1年前に親御さんに会うわけです。世代が違って、現状では違うのかもしれませんが、大体1年ぐらい前には家を探し出すとか、親御さんに会うとか何らかの結婚に向けた行動をします。ですから25歳で結婚するなら24歳で親に会わなければいけないので、20歳ぐらいには相手を見つけたいといけないということです。この手順も古いかもしれませんが。

厚生労働省の調査ですと、現在は恋愛結婚の場合、付き合い始めてから結婚するまでの平均期間は4年～5年なのですね。もちろん若い人のほうが短いということはあるかもしれませんが、25歳で結婚なら21歳ではもう付き合い始めないといけないので、皆さんは何歳か分からないのですけれど、21歳で今、彼・彼女がいなかったら25歳で結婚するのはかなり無理ではないかと思うわけです。

それでも急いで結婚したいという場合、見合い結婚の場合は平均1年なので、見合いがお勧めです。ただ、最初のお見合いでいい人が見つかるかどうかは難しいですけれども。

つまり、結婚する年齢がいつかが、皆さんのイメージするライフコースを成立させるために重要になってくるということなのです。皆さんの親御さんはたぶん私くらいの年齢だと思います。私の年齢では、高等教育への進学と言ってもほとんどが短大で、私の世代で四年制に行くのは1割くらいしかいませんでした。ほかの3割くらいの女性は短大に行っていましたから、20歳から働き始めて、会社の中でいい人を見つけて、4年後に結婚で寿退社というパターンになります。この場合、短大と4年制の卒業年齢2歳のズレは大きいわけです。

またその希望するライフコースに関して、男性と女性の間で差が大きいということです。「男性は専業主婦を望んでいる」というイメージがすごく強いと思うんですけれども、専業主婦を望んでいる男性は10%程度に過ぎないといわれています。

また、女性が家庭的な夫を望んでいるか、男性も育児を手伝って欲しい、家庭的な夫を望んでいるかという、意識調査では「男性に稼得責任がある」と考えている女性がほと

んどです。日本の労働市場は女性に対してすごく厳しく、自分自身では稼ぐ気がないわけではなくても、労働市場から排除されるのではないかとこの心配があるので、これは仕方がないといえば仕方がないのですけれど、男性の側にやはり稼得責任を求めようという意識は理解できるんですけども、男性の側には非常に負担になっているということになります。

つまり、男性と女性のズレというのがどこにあるかということ、「働くことの意識の違い」にあると思います。性別や役割、分業意識の違い、男女の違いについてよく言われるわけですけれども、非常に問題になるのは、家庭内の分業、男性が家事・育児をしないということです。もちろん家事・育児をすることも「働く」ということではありますけれども、その根本にあるのは、「賃金を得る」という意味での働くということの位置づけが男性と女性ではかなり違いがあるということです。男性は意外に女性に働くことを望んでいると言われていますが、女性は、それは責任を持ってできるかどうかかわからないという不安を抱えているということになりますけれども、稼得責任まで負うことは無理だというふうに考えているわけです。ここらへんの「働くこと」の意識の違いが一番大きなズレとして出ていると思います。

さらに、これは「子ども未来財団」が行った調査で、私もプロジェクトに加わっていたのですが、希望するライフコースと実際のライフコースにはズレがあることがわかっています。調査結果をいくつか見てみますと、男性も女性もライフコースの変化に伴って働き方を変えたいというふうに考えていることが分かります。しかし、現実には働き方が選べないという問題があって、それは労働市場の問題であり、日本の労働市場では女性の生き方、働き方と、男性の働き方が違うものとして置かれているということに問題の根幹があるということです。

理想の働き方を聞くと、これは30代・40代の男女に聞いた調査結果ですけれども、左側が男性、右側が女性になります。上から、白いところが「働かない」という選択肢、それから下の水色が「家でできる仕事」、その次が「短時間勤務」、それから次が「フルタイムだが時間の融通がきく仕事」、その下の白っぽい部分が「フルタイムだが残業なし」、それから下の赤い部分が「急な残業もあるフルタイム」という仕事の理想の働き方です。

それで、女性のほうは大体想像がつく通りで、既婚で、子どもが3歳以下の女性は「働かない」という選択肢が理想だという人が4割くらいです。それに対して、45%~60%ぐらいの未婚の女性は「急な残業もあるフルタイム」、やりがいがあるという意味なのかもしれないけれども、これを望んでいる人が女性でも45~60%くらいいるわけです。

子どもが生まれてから、子どもが成長していくまでの間に「家でできる仕事」だとか「短時間勤務」とか「フルタイムだが時間の融通がきく仕事」などを望んでいるということになります。

これはよく言われていることだとは思いますが、男性については、やはりライフステージによって働き方を変えたいというふうに考えられています。いわゆる男性的な働き方とされているような「急な残業もあるようなフルタイムの仕事」を望んでいるのは、未婚のときは男女ともに同じぐらいの割合で、結婚しても、男性の場合はまだそういった、

いわゆる男性的な働き方を望んでいます。けれども、子どもができるとそういった働き方を望まなくなっているということになります。

男性の場合は何を望んでいるかというと、「フルタイムだけれども残業がない」とか「時間の融通がきく」仕事、そういったもので働きたいというふうに考えているということです。

男性は既婚も未婚も同じ働き方をしている、仕事中心の生活を現実には送っている、ということが分かるかと思います。上の段が未婚の男性、下の段が既婚の男性ということになります。理想は、未婚の男性の場合も既婚の男性の場合も、一番多いのは仕事優先ではなくて、仕事・家事・プライベートを両立するところが真ん中の25.4%、27.7%というところになっているわけですが、現実には、既婚の男性も未婚の男性も仕事優先の生活を送っているという人が、未婚の男性では49%、既婚の男性で43%というふうになっているわけです。

それに対して女性は、結婚すると働き方が大きく変わるということです。未婚の女性の場合、やはり男性的な働き方といわれるような仕事優先の人が多く、34.9%なのに対して、既婚の女性というのはそういった働き方が減って、一番多いのが家事優先という働き方で41.6%というふうになるわけです。希望と現実の最も大きな違いというのは、結婚と働き方というのが今見ている通り大きいのですが、それ以前に結婚と出産に関してが、希望と現実でもっとも大きな違いがあるということができるので、その点について強調していきたいと思います。

これは先ほども少し言いましたが、結婚年齢が何歳になるかとか、結婚するか否かとか、初産の年齢だとか出産するか否かといったことの希望と現実が、実はものすごく大きい違いとなってきます。平均初婚年齢が上昇しているということをご存知だと思いますけれども、現在ではほぼ男性で30歳、女性でも30歳に近くなっているわけです。つまり平均初婚年齢ですからほぼ真ん中の人と考えていいかと思いますが、だいたい半分くらいの方は20代で結婚していないということになりますから、相手を探すのも結構大変です。自分が20代で結婚しようと思っても、そういった人が現実には非常に少ないということになります。

もう一つ重要なことは、生涯未婚率が非常に上昇しているということです。生涯未婚率は年々上昇していますが、大まかに言いますと1990年生まれの人たちの予測として、男性で30%、女性で24%が生涯未婚であろうと考えられています。それで、日本の場合、同棲の経験をしたことがある人は現在増えていますけれども、一割程度です。それも長期の同棲というよりは短期の同棲なので、現在20代で同棲している人口は非常に少ないですから、諸外国のような結婚の代替としての同棲といったものがあるわけではなく、生涯未婚というのはつまり、パートナーがずっといない状態というものを指すということに近いわけです。

ですから、これから就職活動をするにあたって、「就職というのはすごく困難だ」というふうに考えることが多いかもしれませんが、一番大きな問題というのは就職だけではなくて、結婚も大問題なのですね。

また、先ほどの調査の一環ですが、今まで恋人や婚約者が一度もいなかった人の割合というのは、20～30代の日本の男女に絞ったときに、女性で17.2%、男性で26.6%

になります。思ったより女性が高くてびっくりしました。昔なら恋人がいたことがなくても見合いや紹介で結婚出来ていたんですけれどね。とにかく、現在の若者は「結婚はしていないけれど恋人はいる」という状態ではないということです。つまり、結婚を自分の手でなかなか決められないという、非常に不確定要素であるということなのです。ですから、結婚を前提にライフコースを組み立てるということはハイリスクなのです。就職も大変ですけれど、自分が頑張ってもうまくいかないということは当然あるのですけれども、それであってもまだ頑張ろうがあるのですが、結婚というのは自分の努力ではいかんともし難いということです。

さらに、子どもは何歳まで産めるのかというふうに考えますと、河合蘭さんという人が書いた『未妊』という本の中にも出ていますけれども、何歳でも産めるような幻想が広がってしまったかと思います。「今は生殖医療が発達したので何歳でも産める」とか、「アラフォー・アラサー」とかいろいろな単語が出てきていて、何歳でも産めるようなイメージがあるかもしれませんが、30代になると確実に妊娠の確率は低くなるわけです。ですから、何歳までも産めるわけでもないという状況の下で、結婚はいつできるのか分からない、出産はいつできるのか分からないという状態であるわけです。

ですから、結婚年齢とか出産年齢を前提にライフコースを組み立てるということは、すごく難しいということになります。それで、現在はライフコースはすごく予測が難しいわけです。「ライフコースが多様化している」というふうに言われていますけれども、いろいろな類型ができたということではなくて、いろいろな調査をやってみますと、もうパターンが溶けてなくなったといいますか、パターンがなくなったということが多様化の現実なのです。

そして、「働くことというのはどういうことなのか」ということですが、働くことというのは、女子学生へのメッセージがいつも多いので、女子学生寄りになるんですけれども、何か苦役のようなイメージがすごくあるかと思うのですが、男性にとっても負担感がすごく高いと思います。

たとえば、私がいる社会福祉学科で、障害者の労働についていろいろお話をする機会があるのですが、障害のある方でもただお金だけもらって暮らしていればいいというわけではなくて、なぜ作業所へ行って働くのか。それは、働くことというのは働きがいがあることだからです。もちろん、家事や育児にもやりがいはあるのですけれども、働くということは、人のネットワークを作ったり、自分の満足感というものを高めるということになるということです。

それで、結婚というのはどういうことかということ、二人で人生を作り上げて家族キャリアを形成していくということになります。もちろん家族キャリアというのは個人のキャリアになるわけですが、それは、相手と一緒に共同作業の上で自分の家族キャリアというものを作っていくことです。それで、それが分業的になりますと、非常にリスクが高いといえますか、相手への負担感が非常に大きいということになります。男性も稼得役割を一人で担っていくことが非常に困難であるということにもなりますし、女性の側も育児不安と言われているように育児を一人でやっていくというのは非常に難しいということになります。

ですから、現在言われているような、「ワーク・ライフ・バランス」というものが重要になってくるということなのです。それで、誰にとってワーク・ライフ・バランスが重要かということで、仕事と家庭の両立支援というと女性向けという感じなんですけれども、ワーク・ライフ・バランスが取れていないのは専業主婦と男性なのです。働く女性はバランスを取らないとならない状況に置かれているので、必然的にワークとライフのバランスが取れているわけです。いずれも労働であることは問題ですが。

ですから、これからの世の中という話をすると、極端な話、専業主婦の方と男性のワーク・ライフ・バランスを、働く女性と同じようにすることが必要になってくると思います。では、学生の方は何を考えればいいのかというと、やはり仕事と家庭のバランスを、キュウキュウの日本の辛い共働き世帯を思い浮かべないで、もちろん恵まれた環境の会社じゃないと、仕事を続けていくということは難しいかと思うのですけれども、何かの形で仕事を続けていくということが重要になってきます。やはり「ライフ」だけですと非常に辛い思いというか、子育て不安に陥るとかネットワークが途絶えてしまうとか、さまざまな問題が起きてきてしまいます。ですから、ワーク・ライフ・バランスの必要性というのが主婦の方と男性の方にとって非常に重要なのですね。

もしそういう選択をするという場合、男性の場合は選択のしようがないかもしれませんが、考えていかなければいけないということです。

それから、女性の場合は、結婚や出産によってやはり人生が大きく変わっていきますので、そこでセカンド・チャンス、セカンド・キャリアというものをつかんでいかなければいけないわけです。これは日本女子大でも「現代女性キャリア研究所」というところで調査研究をしています。多くの女性はいったん仕事をやめる、あるいは仕事へのエネルギーをダウンさせるということが必要になってきます。本当はたぶん男性にもそういう選択肢があるといいと思うんですけれども、日本だとなかなかそういかないという現状があります。それを取る勇気を持つてみるというのもいいかと思えますけれども。女性向けにお話してしまうと、やはりセカンド・チャンスやセカンド・キャリアというものをつかむための仕組みが必要だということです。

その仕組みは何かということなんですけれども、やはり、言葉にしてしまうと単純なのですけれども、「引き出しの多さ」とか、「アンテナを張ること」と言われるようなこと、これは私自身は同じ意味として使っています。つまり、情報をたくさん取ってればいいというわけではなくて、今、皆さんの時代ですと情報はとにかくたくさんありますから、その情報を何でも取っていると大変なことになります。特に、育児不安のお母さんなどは、ネットで「育児不安・悩み」を探すとどんどん不安になっていきます。それは不安な人たちがたくさん集まっているからです。

ですから、情報がたくさんあればいいというわけではなくて、いろいろな情報を必要な引き出しから出せることや、自分の引き出しの中に有効そうな情報を入れておけるような、今は必要がないんだけど、何となくこれから必要がありそうだなというアンテナを張り巡らせて、その引き出しにしまえること。それで、その時重要じゃなくても、「あっ」という時に、その引き出しを開けてその情報を取り出せるということです。すごく抽象的なので

すが、そのアンテナを育てるのが大学時代なのですね。大学時代に「今は関係ないな」と思っているような話でも、後でハッと思う事がいろいろあるわけです。いろいろな情報が引き出しに入っていると、必要なときに開けて、「あっ、ここにあった」というようなことがあって、本当にセカンド・チャンスをつかむことが出来るのではないかと思います。

ちょっと抽象的なのですけれど、それは単純に資格を持っていけばいいということではなくて、女性の場合、資格は大事は大事なんですけど、資格だけではなくてその時代に合った何かを取り出せるということがあるのですね。

それともう1点、やはり重なっている部分もありますけれども、ネットワークの存在です。それは小学校のころから言われていることかもしれませんが、自分のネットワークを育てることです。

専業主婦になることの辛い点というのは、ネットワークが縮みがちになってしまうということです。専業主婦の方でも、もともとネットワーク力がある人は広くできますけれども、それはすごく個人の能力差に依存するところがあります。

働いたり外に出ていると、個人の能力に関係なくネットワークというのが広がる可能性を持っているということです。「コンボイ」というのは、自分の人生の護衛艦といわれるものです。自分の人生を応援してくれる、直接助けにはならないかもしれないけれど応援してくれる人というのを、人生ライフコースというのは自分のコンボイをいかに作っていくのかと言われていています。ですから、ネットワークを閉じないように、そして自分のコンボイというものを一生かけて配置していくということがとても大事だと言われていています。非常に予測が難しく、このライフコース、職業キャリアや家族キャリアを考えるときに、何歳で結婚して何歳で出産するかということが、とくに女性にとっては大きな問題なのですけれど、これが本当に予測できないわけです。

それで、保育所が増えたら働けるのかということ、6時までしか学童を預ってもらえないというようなことがあって、子どもが小学生になって退職する人も多いのです。ですから、保育所が増えればいいというだけではなくて、いろいろな要因によって女性の人生は左右されるわけです。そのときに、やはり引き出しの多さとアンテナ、それからネットワークを作っていくことやコンボイを配置していくということが大事であるということです。

少し時間がのびてしまってすみません。これで終わります。

司会：

興味深いお話をありがとうございました。

教職員の方の講演会はまた後でありますので、学生さん優先で質問がありましたら受け付けさせていただきます。

どうぞ何か質問がありましたら。

学生：

＊

*

永井：

結婚適齢期に関しては、意味合いとしては、短大を出てから5年後の適齢期というものがあって、それまでに結婚しなければいけないという気概が非常に強かったけれども、5年という期間があったけれども、今だと4年制大学卒業のほうが多いので、もうちょっと短くなり3年になってしまって、結婚適齢期と言われていた年齢までの時間は短いですよという話と、未婚化の話は別です。その結婚適齢期が適用されていたといえますか、強く言われていた私の世代も、結局結婚しなかった人が非常に多いので、そこでなぜ結婚しなかったのかという問題にはなるかと思います。

ただ、おっしゃっているのは、私に加わっている調査などでも同じような結果は確かに出ていまして、高学歴女性のほうが結婚確率が高くなるという分析結果はあります。

それが20代の途中までは、低学歴の人のほうが結婚確率は高いのですが、大体30代で追いついて、それは卒業してからの期間が違うからですが、30歳を超えると高学歴女性のほうが結婚確率が高くなります。なぜかというところから先は解釈ですけども、高学歴女性のほうが高学歴男性とめぐり合うことができ、また、おそらく高学歴女性のほうが正規雇用についているため、正規雇用の男性とめぐり合えるので結婚確率が高くなるというふうに私は解釈しております。

同じように、初職が正規雇用の女性のほうが、30歳時の結婚確率は高くなるということです。やはりそこから先も解釈ですが、やはり相手を見つけやすい、経済能力や稼得能力の高い男性にめぐり合えるからだだと思います。経済能力のある男性のほうが結婚できるのは昔から確実で、今もそうなのですが、それはやはり男性のほうが稼得責任を負わなければいけないと、とりわけ男性が強く意識しているからではないかと思います。非正規雇用の男性と付き合っていると、なかなか親に紹介できないというような、男性に厳しいところがあります。

司会：

ほかに質問はありますか。特にないようでしたら、5分間休憩を入れて、3時15分から講演会を再開させていただきます。学生の方も、もし興味があれば、引き続いて第2部のほうもご参加ください。

(第1部終了)

第2部 女子学生のキャリア形成教育の現状と課題

司会：

それでは時間になりましたので、第2部を始めさせていただきます。

先生のご経歴のご紹介は時間の都合上、はしょらせていただきます。

では永井先生、よろしくお願いいたします。

永井先生：

人が入れ替わると思っておりましたが、(替わっていませんでしたので)先ほどお話した「ライフコースとは何か」という部分ははしょらせていただきます。また、学生へのアンケートについてはざっくりお話して、こちら側の話に進めたいと思います。

先ほど聞いていただいた方もいらっしゃるので、パパとだけお話していきますけれども、事前に学生さんにライフコースイメージについて、簡単なA4表裏1枚のアンケートにご回答いただきました。

女子学生のほうが再就職型を希望しておりまして、就業継続を希望しているのは男子学生のほうが多いという結果でした。結婚希望年齢を聞いたところ、女子学生の場合25歳のところに山がありまして、ほとんどが30歳までに結婚を望み、男子学生も1番高い山が30歳というところにあつたということです。

希望の子ども人数は、よくあるように子ども2人が1番多いという結果で、それから、再就職時というのは「子どもが幼稚園に入ったら」、「小学校に入ったら」、「中学校に入ったら」というような回答でした。

それで、以上の回答から計算していくと、子どもを産み終わる年齢というのが、この学生さんのイメージですと、1番大きい山が30歳、それから、その次の山が32歳ということになります。

そして、それぞれの学生さんが考える、子どもの手が離れて再就職しようとする年齢とあわせて考えると、子どもの手が離れるときに自分が何歳かということ、だいたい30歳～35歳のところと30代後半のところに大きな山があるという結果です。

それにしたがって、離職期間がどのくらいになるかということ、再就職希望の方に限定してみますと、5年～8年というようなところに山があるということです。

この数字を見まして、中京大学の学生さんのライフコースイメージについての感想ですが、先ほども言いましたけれど、結婚年齢が非常に低いことに本当に驚いております。

先ほどから割と結婚の話をくどくどしていたのは、もちろん記事について見ていただいたということもあるんですけど、結婚年齢がライフコースを考える上で重要だからです。首都圏の大学生に行った同じような簡単なアンケートも行っていますが、日本女子大で私の授業の時には、キャリアというライフコースをイメージしてもらい、自分の生涯年齢というものを書いてもらって、その下に何歳で結婚するか家族時間というものを書いてもらっています。

また、私は元々家計経済研究所というところで研究員をしていたので、夫の予想する収入ですとか、自分の収入ですとか収入の変化、それから大きな買い物として住宅購入、子どもが大学に行くかどうかも入れて支出の変化を、生涯年齢の中で考えてもらいます。自分が何歳の時に子どもが大学に行くとか、住宅取得年齢とか、そういったものを入れてもらうと、いろいろ齟齬が出てくるといいますか、計算が合わなくなることを認識してもらうという作業してもらっています。今回のアンケートはかなり簡略版で行っております。

まず、その首都圏の学生と、うち（日本女子大学）の学生と、ここの学生さんの違いは結婚年齢です。ここの学生さんの予想結婚年齢が低いということです。そして、再就職パターンも、先ほどから話に出ている私の世代の女性のライフコース、短大を出て寿退社をして、割とすぐに出産してパートで働いているというイメージとすごく重なります。私の高校の時の友人のライフコースに沿ったような数字が出てきましたので、親御さんのライフコースをモデルにしているのだろうか、というふうに考えました。ですから、そういう意味ではライフコース上の様々なイベントを経験する生涯年齢の数字は合っているわけです。

けれども、やはり早い結婚年齢というものが前提となっているということに留意しなければなりません。日本女子大の学生は結婚年齢をまず30歳にしているわけです。それはある意味、現実的な数字です。しかし、その30歳結婚で双六をスタートさせ、親と似たようなライフコースを歩もうとするので、結婚年齢が親とずれている分、ボロボロと合わなくなっていくわけです。子どもの年齢とか、子どもの人数とか希望していたものをライフコースに入れ込んでいくと、25歳から40歳までに入れたものを、30歳から40歳の間に入れ込まなければいけなくなるので合わなくなってくるわけです。けれども、今回の中京大学の学生さんにはそれがなくて、素直に25歳から始まったことが非常に驚きでした。その10年と15年の差がすごく大きいんですけれども、スタートが合わないと、うちの学生の計算間違いと同じで全部合わなくなるということです。

それで、また学生さんがいるので怒られるかもしれませんが、私が通常学生さんとお話したり、授業の中でいろいろなアンケート行ったり、ゲストのスピーカーの方にお話してもらった感想などを見ていた時に、学生さん方が一般的な誤解として強く思っているものについてご紹介していきたいと思います。

ここの学生さんと重なるかどうかというのが分からないのですけれども、やはり結婚についての誤解というのがあって、希望した年齢で結婚できると思っているかどうか、強く思っているかどうかは分からないのですが、日本女子大の学生だからかもしれませんが、一般的にそうなのかというのは結婚については分からないのですけれども、「20代で結婚する」と言い切るわけです。「するといっても自分で決められないことなんですよ」と言うと、「そうだよね」と。でも、先ほども話したように「25歳で結婚するんだったら、24歳までに相手を親に紹介しないとね」と。それで、「普通の恋愛結婚だったら4年ぐらい付き合うんだから、もう20歳の時に彼女がいなきゃね」という話になるわけです。でも、「彼や彼女が今いないと、5年後に結婚しているというのはかなり確率として低いよね」という話をすると、「うーん」ということになってしまうということです。

そして、出産についての誤解なのですから、出産については生殖医療の発達がかな

り大きいのではないかと思うのですが、40歳になってもみんな子どもが産めると思っているわけです。それをどのくらい確信しているかという点、何十年も後のことで身近ではないので、真剣に思っているという意味ではないのだろうとは思いますが、そう思っているということです。ですから、30代だったらまず間違いなく子どもが産めるものだというふうに多分思っていると思います。

卒業式後の謝恩会でしばしば、「ライフコースはとりわけ結婚や出産については思ったようにいかないかもしれない、でも、その時でもいろいろな道があるんだから、一つのことにはこだわらずに間口を広げていこう」というような話をしています。特に、女子学生にとって結婚や出産は、現実的にはすごく人生を大きく左右するものなのですが、その結婚や出産についての誤解が非常に大きいわけです。

でも、先ほどのアンケートの結果を見ると、割と早く結婚して20代に出産するつもりの方が多かったです。20代は) 出産能力が高いので、多くの人ができるのではないかとは思いますが、けれども、たとえばうちの学生や首都圏の学生のアンケートのように、30歳ぐらいで結婚しよう、35歳までに結婚しようと思っていると、そこから子どもを持つというのは非常に難しく、可能性としては低くなるのだということについても知らなければいけないと思うわけです。

女子学生にとっては、やはり子どもを持つということが多くの場合は非常に夢のあることというふうに考えられていて、仕事と家庭の両立にしろ、専業主婦にしろ、子どものよい母親になりたいと思っているようで、出産というのは必ずしもあるかどうか分からないというようなことも、本当は大学で教えるようなことではないですし、また、キャリア教育の中で教えるべきことではないのかもしれませんが、そういう想定というのにも必要だなというふうに考えております。

女子学生にとって結婚と出産はこれだけ大事で、必ずするものだと思っていると話したのですが、それにもかかわらず、職業キャリアと家族キャリアの乖離も著しいわけです。

職業キャリアについてのイメージというのは、男性のキャリアモデルを描いているのです。いわゆる「キャリアウーマン」というかたちになろうとしている女性在实际にはそんなに多くないのは確かですが、ただ、そのキャリアを追い掛けている、キャリアをどんどん積み上げて行こうという女性に話を聞いてみると、男性のキャリアモデルというものを描いていて、男性のキャリアモデルでしかキャリア積み上げにくいというところに日本の問題点はあると思うわけです。

女性に問題があるということだけではないのですが、仕事をしていくということのイメージが、男性が仕事を積み上げて行くのと同じようにできるとなぜか思っていて、あんなに結婚や出産ということに固執していたにもかかわらず、それとは別に職業キャリアというものを考えていて、それがマッチしていないところがあるのです。

それは学生の時代ではなくて、卒業後の20代の働く女性と話していると、そういう職業キャリアと家族キャリアが完全に乖離しているわけです。すでに結婚した人は、職業キャリアとか、家族キャリアを人生の中で合わせて行くということが難しいとか、男性がい

いというわけではないのですけれど、男性と同じようには行かないことに気づくのです。けれども、まだ 20 代のほうは結婚をしていないので、職業キャリアとか家族キャリアを合わせて行くと、実は男性と同じようにはならないということを、もちろん男性でも家族キャリアと整合させて、仕事と家庭を両立されている方も多いのですけれど、日本ではそういう方がまだ少ないので、ちょっと除いてお話をさせていただきますが、職業キャリアと家族キャリアを重ね合わせてキャリア・アップしていくというこのイメージが、全くと言っていいほどないと思います。

そして、1 番大きな誤解だと思うのですけれども、男性についての誤解というものがあるように思います。特に男性についての誤解というのは、男性が専業主婦を望んでいるというふうに強く思っている人がいろんなアンケートでも多いわけです。けれども必ずしも男性は専業主婦を望んでいるわけではなく、特に若い男性は妻に働いてほしいというふうに思っているということを知ったほうがいいと思うわけです。

それは、結婚するという時にも重要になってくると思います、結婚相手とこれからどういふふうに仕事と家庭を二人で分担していくかというときに、元々男性と女性の間で相手が何を期待しているかというところにすでにズレが生じていて、男性は専業主婦を望んでいるというふうに固く思い込んでいるところがズレを大きくしているように思います。

とは言っても、男性が女性に、専業主婦ではなくて仕事をしてほしいというふうに望んでいると言ったとしても、男性が家事や育児を本来自分がやるべきものとして考えているかということ、確かにそれは疑問で、手伝う程度にしか思っていない場合が多いかとは思いますが。ただ、働くということに関して言うと、男性も女性に働いてほしいというふうに思っているということです。

首都圏で行った男子大学生の調査では、学部によってかなり反応が違うのですけれども、たとえば法学部などは勝ち組意識が強いというわけではないのですけれど、成功したという感覚のあるように見受けられますが、それと関連してか専業主婦になってほしいという意識がちょっと強いわけです。多少学部・学科によっての違いはあるのですけれども、一般的に言って必ずしも男性が専業主婦を望んでいるわけではないにもかかわらず、女子学生、あるいは女性はそういうような誤解をしているということです。

それと、男性についての誤解と重なっているのですけれど、仕事についても大きく誤解をしていると思います。いろいろな女性や女子学生に話を聞いていると、「私は男性みたいに仕事をする自信がない」というふうによく言うのです。男性に私の話を聞かれると男性から怒られそうですけれども、男性みたいに仕事をする自信がないということが、どういふ根拠で出てくるのか全く分からないわけです。

男性教員が多いので話しにくいのですけれども、半分冗談だと思って聞いてください。私自身、学生の時に同級生の男子を見て、幼稚というか、「馬鹿じゃないか」と思ってずっと暮らしていたのです。自分も筋肉ばかり鍛えているほうでしたので、単位すれすれで、ぎりぎりの低空飛行で留年をせずにいたほうなのであまりいばれたものではないのですが、ふだんの言動から見て、「大丈夫かな」という男性学生が、部活の中でもすごく多かったのです。

それで、今もよく飲んだりするのですが、いっばしの大企業の部長さんになっていたりするわけです。歳が歳ですから部長さんにもなるのかもしれないのですが、りっぱになっているのですね、「あんなに馬鹿だったのに」、と思うわけです。やはり、職業内訓練と周りからの期待によって、いかにあの馬鹿な男子がこんなに立派なサラリーマンになって経済に貢献しているのかと本当に思うわけです。

その思いをいくら女子学生に伝えても、「男性は仕事ができる」というイメージがすごく強くて、「女性はできない」と思い込んでいるのですね。それは、とりわけ女子大の学生の幻想かもしれなくて、共学にいと男子同級生のほぼ9割方は馬鹿に見えるのかもしれませんが。馬鹿に見えたら、やはりそれは自分の自信につながっていくので、いいことなのです。

うちの学生は、幻想を抱いているのではないかと本当に思うのですね。ただ、言いたいのは、やはり日本の企業は女性にはエネルギーや時間などをなかなか投資してくれない、男女の差のように見えるものは投資の違いなのだということを知って欲しいということです。

なかなか投資してくれないから自分もなかなか成長できないかもしれないけれども、別に最初から男性のような仕事ができないわけではないのだということです。就活をしているとき、なかなか上手く就職活動もできなくなると、そして女性職と言われるようなところで、それを望む学生ももちろん多いのですけれども、取ると取られるということになると、やはり女性だから思わず強くなる場合もあるわけですが、やはり仕事についての誤解という、それは元々男性は仕事ができるのではなくて、周りがどう育てるかによるのだ、自分だって育つ可能性があるのだということ、日々言っているわけです。

先ほど話を飛ばしてしまったので、3の「予測が難しいライフコース」のところを補足させていただきたいのですが、ライフコースの多様化しばしばいわれますが、ライフコースの多様化というのは、いろいろなタイプのライフコースができたのではないのです。パターンの境界が崩壊したということなのです。

それを強く思ったのは、初職である家計済研究所というところで10年おきに首都圏の核家族に対して行っている調査で、89年に行った調査と99年に行った調査では、妻の働き方別に世帯類型を作ると、割と類型ができたわけです。

たとえば、「妻常勤世帯」というのは、夫の家事や育児参加というのも多くて、妻の生活満足度も高い。「妻が専業主婦世帯」というのは、夫の家事参加や育児参加は少ないけれども生活満足度が高い。それから、「妻がパート世帯」というのは、専業主婦になれない妻と、フルタイム、常勤になれない妻の集合のようなところで、そこが1番生活満足度が低いというような結果だったのです。分業以外の親子関係や夫婦関係のパターンについても、割とその類型で、あるいは妻が自営世帯とか、自営の家族の世帯というものもある程度パターンができて、89年・99年というのは、実はあまり大きな変化がなく、類型というものが何となく見えていたのです。

それで、2000年に入ってから首都圏の調査ですけれども、2008年に行った調査ですと、激変しているわけです。一応その類型で報告書は作ったのですが、パターンが見えないのです。つまり、以前は「妻が常勤」というのは、常勤で働ける条件があって、働きたい人が働いていたわけです。でも、2000年に入ってから、常勤で働きたくないけれど

夫が失業、あるいは失業の可能性があるので働かざるを得ない、辞めたらもう戻れないしパートでは多分やっていけないからという人と、条件が悪くてもそれでも働きたいという人が含まれているわけです。

そして、以前は夫が家事や育児を手伝える、公務員だとか教員といったところで妻が常勤となったわけですが、夫の働き方とは別に妻は常勤を選ぶようになったり、選ばれるを得なくなってきたという状態です。ですから、以前とは違って必ずしも生活満足度は高くないのです。

それは専業主婦世帯でも同様で、専業主婦になりたくてなっているわけではなくて、失業中という人もかなり含まれているということで、類型というのが溶けてなくなってきたのです。意外なことに、妻がパート世帯のほうが生活満足度が高いのです。おそらくフルタイムの常勤の人のように無茶苦茶な働き方をしたくないという人も混じっていて、それでパートを選んでいる人が増えているというような気がしています。

ライフコースが多様化したというと、一般的にはいろいろな選択肢があって、いろいろなパターンができたというようなイメージがあるのですが、そうではなくて、境界が崩れてなくなって、あみだくじのような、女性誌にある「YES/NO クイズ」のような、その時、その時の状況に応じて、「はい/いいえ」で状況を選択していくと女性誌のクイズのようなA、B、Cとかパターンが出てくるんですけど、それがかなり無限な状態であるというのが、今のライフコースであると思うのです。昔もライフコースというのは多様だったのかもしれないのですが、ある程度類型に分けて説明がつくことがすごく多かったような気がするわけです。

ですから、学生さんのライフコースイメージについてパターンで説明したのですが、学生さんに説明する時も、本当はパターンでも説明がつかない、自分がどこのどういった働き方になる、どういう家族生活を送るといのは、無数の選択肢、必ずしも自分では選択できないのですが、別れ目で「YES/NO」、「何歳で子どもができた」とか、「子どもが欲しくなかったのにできちゃった」とか、いろいろなものの組み合わせで自分のライフコースが成り立つのだというようなことをお話しています。そして、実際調査をやってみても、類型というのはなくなっているのだなということをつくづく感じるということです。

それと、ワーク・ライフ・バランスを考えると、仕事というのは何か嫌なことのよう、減らさなければいけないことのようなイメージがあると思います。もちろん時間は短くすべきだと思いますが、働くことというのは稼ぐだけではなく、楽しいことであるということです。

たしかに、働いていると嫌なことはたくさんありますし、私も昔働いていたところで、机を蹴飛ばしたくなるような日もありましたけれども、それはそれで、やはりやりがいとか達成感が得られるわけです。

家庭以外の場所で達成感を得ることがなぜ重要なのかを考える際に、なぜ障害者の人が働く場を必要としているのかというのを考えれば、やはり働くことは人生にとって大きな意味があることだとわかると思います。別にフルタイムではなくても、マミートラックにのった働き方でもいいので、出世を考えなくても、キャリアウーマンになる必要もないわけです。

ただ、働くということを何かのかたちで続けていく。もし十分なお金に換えられなくても、いろいろな活動の仕方があるので、何らかの活動を続けていけば道は開けると、そしてやりがいや達成感といったものを得ることになるのだということを、強く言っています。

先ほど結婚ということを言いましたが、結婚というのはやはり二人の問題です。昔の80年代型の分業というのは非常に難しい現代でどうすればよいのでしょうか。働く女性はワーク・ライフ・バランスが強制的に取れてしまっています。ワーク・ライフ・バランスに関心がある女子学生というのは、両立を望んでいる学生です。自分自身の働き方に関心が高いのはよく分かるのですが、子どもが生まれてしまうと強制的にバランスは取れてしまいますので、実は配偶者にどうワーク・ライフ・バランスを取らせるかというのが大きい問題だということなのです。

また、現状では、女性の場合、やはりセカンドチャンス・セカンドキャリアというものにかけていかなければいけないので、セカンドチャンスやセカンドキャリアに結び付けていくということは、女子大でも心がけています。私のいる社会福祉学科の特徴であるとは思いますが、社会福祉士などの資格がある学生はとくにそうなのですが、資格はなくても仕事はあるので、OGのメーリングリストというものを持っていて、福祉学科に来た求人情報を常に流すというようなかたちを取っています。

また、リカレント教育課程をおいていて、その卒業生は今のところ100パーセント再就職はできています。大学独自で仕事に就くための訓練を行うと同時に、出口まで見つけるという、再就職先まで見つけるような再就職支援というのを大学で行っています。

現在のところ卒業生に限らず、女性だけですけれども社会人を受け入れて、セカンドチャンスにつなげるような教育をして仕事に結びつけるというようなことをしているわけです。ですから、大学の側としても共学ですと難しいかとは思いますが、女子大の場合はそういった機能を果たすということを心がけております。

再就職支援の話をしたのですが、女子学生にとっての就職活動ということであると、結構優秀な学生が挫折してしまうというケースが多いわけです。優秀な学生が挫折するケースというのは、間口がすごく狭くなる場合なのですね。こういった仕事に就きたいという職種を非常に狭くとらえている場合で、たぶん皆様のほうが私よりも学生の就職活動などについてのお世話や、それこそキャリアが長いのかなというふうに思うのですが、やはりその学生にとって間口を広く、一つの自分の関心そのものの直結ではなくて、もう少し広げられるような関心の広さを持てればいいなと思っているのです。ただ、それは就職活動のときにできることではなくて、学生時代4年間を通してできる能力なのではないかなというふうに思います。

たとえば、私は日本女子大に行く前に2年間出向のようなかたちで東大の社会科学研究所というところにいたのですが、そこで玄田有史さんと一緒に「希望学」というプロジェクトをやっていて、『希望学』という本も出したりしておりました。

その玄田さんが講演の中でよく使っているネタですが、「子どものときに野球選手になりたかった。でも野球選手にはなれなかった。だからといって挫折したんじゃない、その挫折を乗り越えて、野球場の芝を整備する会社に入った」と。もともと何で野球をや

りたかったかという、その球場がすごく素晴らしかったから、その球場の青い芝が好きだったからで、あの爽快感がたまらないということを思い出して、整備する会社に入った」というような話があります。

そういう、何か狭い目標ではなくて、もう少しそれにかかわる、何でそれが好きだったのかということを考えて広げていくことで、優秀な学生こそもっといい選択というものができるのではないかと思います。それを広げるための教養というか、教育といったものが大学時代でできたらいいなというふうに考えています。

また、学生さんを見ていると、就職活動の中でもものすごく意識が変わる女子学生が多いわけです。あまりの就活の厳しさにへこたれる学生さんがやはり多くて、「専業主婦になりたい」と言ってくる学生さんや、「早く結婚して就職なんかしたくない」という学生さんもいますけれど、一方で就活を通して社会に出ることで社会に目覚めていく学生さんもたくさんいらっしゃって、そういう学生さんの支援というのもしていきたいなというふうに考えています。

その際に、やはりイメージで、仕事を続けることはキャリアウーマンというイメージしか比較的なくて、また最近では「女性職」と言われるような働き方も出てきています。それはマミートラックというような、お母さんとしての働き方しかできないというようなことで批判的にとらえられる場合も多いのですが、あるいはキャリアを目指している女子学生が、マミートラックに乗るような職場しか見つからなかったとしても、それはそれでもいいと、そこからでも転職なり何なりしていく機会というのはあるのだということ、就職活動の中で強くお知らせしているということです。

その学生さんの引き出しの多さやアンテナを持つということに貢献できるような教育を目指していきたいなというふうに考えています。そして、大学時代の友人というのが学生さんのネットワークの一部に強くなれるように、学生の活動というのを支援して、それで、学生さんのコンボイというものを形成していくということ、大学の教員、ゼミの先生というわけではないですけども、誰かがそのコンボイの中になれたらいいなというふうに考えています。

やはり人生の中において、引き出しの多さとコンボイといったものが、とりわけいろいろな人生を中断されがちな女子学生の生き方の中で重要になってくると思います。

以上でお話を終わります。

司会：

ありがとうございました。

それではしばらく質疑応答の時間をもちたいと思います。永井先生のご講演の中で何かご意見やご質問がありましたら、どうぞお願いします。

フロア（小峰）：

国際教養学部の小峰と申します。たいへん興味深いお話をありがとうございました。私は先生の言われるライフコースということに非常に興味がありまして、それについてご質問したいと思います。

私は教職課程を担当しています。先ほど「男性は馬鹿じゃないか」というお話があった

のですけれども、最近教育関係の方々でも教師のライフコースということの研究されている方もずいぶんおられます。つまり職業の中でまた成長をしていく、教師としてもまた成長していくと。ところがその中で男性と女性では成長の仕方が違うわけです。

先生がおっしゃられたように、たしかに男性は馬鹿なのだけれども、一定の年齢を重ねていって管理職になったり、あるいは教頭とか校長になったりすると、むしろチームとして学校の教育力を高めようということで、非常に視野が広がっていく、と。昔は上司だけにしか関心がないという教師を「ヒラメ教師」なんて言ったわけですが、そうじゃないということが、調査などでもずいぶん明らかになっています。

また、それに対して女性は結婚や、あるいはいいことではないのだけれども介護だとかそういうものが女性教員にしわ寄せされたりします。また、自分も子どもを産んで、教育観とか子ども観が豊かになる、と。つまり男性は直線的に成長するのだけれども、女性の場合にはらせん的に成長する。男性と女性の成長の仕方はちょっと違うのだというような研究をされている方もいらっしゃるのです。

それで、私がお聞きしたいのは、この地方の女子は、就職の間口が非常に狭かったり、あるいは結婚観というのが首都圏と比べて5歳ぐらい早目にというのがありますが、この地域で女性が自己実現できるには、先生はどういうような可能性があると考えていらっしゃるのかについてお聞きしたいと思います。

この地方は保守的でもありますし、キャリアを続けるには、女性がいわゆる総合職だとか男性モデルでバリバリやっていたらいけないというプレッシャーもあるかもしれないのですけれども、そうではない、もう一つの東海版ライフコースの実現といいますか、こんなような自己実現の仕方、女性がセカンドキャリアを充実させている、あるいはこんなような生き方もあるのではないかと、そういうことを、今何人か残っていらっしゃる女子学生に、少し希望といいますか、ビジョンといいますか、そういうものをちょっと与えていただきたいと思います。私もぜひお聞きしたいと思っていますので、お願いします。

永井：

この地域についての知識が少ないのですけれども、やりがいというか、働くということ、つながるといことはやはり継続なので、何らかのかたちで何かの活動を行っていくことが大事なのですね。

ただ、ほんとうは仕事に就いてしまうと強制的に活動しなければいけないので、もともとそんなに活発じゃない人でも動くようになるわけです。私自身、あまりリーダーシップが取れない人間ですし、今しゃべっていてもそうかもしれないですけど、場が与えられるとできるということはやはり多いので、本当は保守的な地域こそ女性に場を与えてあげないと難しいのではないかなということとはとても思うわけです。

それで、もともと活発なネットワークを広げられる女性であるならば、どんな状況でもネットワークを広げていくことができ、現在 NPO だとかそういった活動というのは、男性もやっていますけれども、女性が担っている部分はかなり大きいですし、子育て広場ですとか、いろいろな子育てに関するような活動ですとか、そういったもので自分のやりがいというのを発揮していく道というのはすごくありますので、いろいろな目を持って、い

ろいろな活動に入って行って、あるいは自分でその活動を立ち上げていくというのを目指していただきたいと思います。現在はそういった活動を行いやすい世の中なので、これはやっつけていけないのではないかと思います。

ただ、自分自身もそうですけれど、そんなに自信があるタイプではないので、そうすると、やはり地域で女性を活用するような動きがないと、女性には厳しいのではないかなとは思っています。ジェンダー論的にいえば、女性というのは他人の希望をかなえてあげるように社会化されていますので、地域で女性が保守的であれば、女性が社会のニーズを汲み取っておとなしくしていようという思いが強くなってしまいますので、その中で自己実現を図りなさいって言われても、やはり難しいのではないかと思います。身もふたもないですが、厳しいと思います。

それで、男性的なリーダー像を求められるというようなお話があったかと思うのですが、女子学生がイメージするリーダー像というのが、周りの人のリーダー像というより、いわゆる男性のリーダー像なのです。

ただ、たとえば霞ヶ関のキャリア組を見ていると、男性のリーダーはわりと多様なモデルがあるというか、自分なりのリーダーをやっているのを認められるのです。それが女性のキャリア組を見ていると、それはドイツとかほかの国を見ても割とそうなのですけど、女性でリーダーになる場合というのは、すごく模範的な一つのイメージのリーダーに収まっている場合が多くて、それからみ出るとリーダーらしくないというふうに言われてしまうことが多いのです。

ですから、女性がリーダーになりにくいのは、女性が向かないからではなくて、もともと女性はリーダーに向かないと考えられているので、男性と同じように多様なリーダー像を演じることができないために、リーダーになりにくいのです。

ですから、そこが程度自由にきく場所であれば、たぶん大学の中でもいろいろなタイプのリーダー像があると思うのですけれども、それが可能であれば女性はすごくリーダーにもなりやすく、自分自身が固定的なリーダーのイメージをはずれて、自分が真っ先に行くタイプではなくて、人を働かすのが上手なリーダーもほんとうはいっぱいいるはずなのです。

自分らしくリーダーができる状況があれば、女性はどんどんリーダーになれると思うのですけれども、実際男性はいろいろなタイプのリーダーがいるのに女性は模範的な一つのタイプのリーダーに収まらなければならないということで、霞ヶ関のキャリア組を見てもまだそういうイメージが非常に強いので、この地域が非常に保守的であるとするならば、リーダーを目指すというのはたぶん難しいかもしれないと思うわけです。

ただ、もしそうであるならば、リーダーを動かすサブリーダーを目指してはいかがでしょうか。たぶん女性として社会化されて保守的な地域であればそれは得意なはずで、自分としても違和感を感じないはずで、それで、実際にやりがいを感じるし、やっつければたぶん時代も若干変わってきて、自分がもう少し年齢を経たときにリーダーになる可能性は出てくるのではないかなと思います。

あまり夢を与えられる言葉はないのですが、やはり厳しくても何らかの仕事を継続する、

何かのかたちで所属する、何かの活動をつなげるということがすごく重要だと思います。いったん仕事をやめると次に一步踏み出すのはすごく怖いので、子どもが生まれて小学校までと言わないで、1歳のとき、3歳のときにどんどんチャレンジする。別に就職ではなくてもいいですし、焦る必要もないのですけれど、「何かないかな」という目だけは開いてほしいですね。自信がないからちょっと目を閉じるのではなくて、焦らなくてもいいのですが、結構就職は「棚ボタ」が多いですから、目を開いていることがたぶんすごく大事だと思います。

あまり現実的ではないかもしれませんが、そういうことです。

司会：

ほかに質問はありますか。風間先生、お願いします。

フロア（風間）：

お話ありがとうございました。

今日の講演をとおして、私が大切だと感じたポイントは2点あります。①学生がライフコースについて抱いている「誤解」を踏まえて、ライフコースが多様化している現実を伝えること、②実際にそうした現実を伝えることが、最後に話された「引き出しを増やす」ことにつながり、思ったとおりに人生は進まない場合でも、それに対応できる認識の枠組みを広げていく。

そのうえで、長期的な視点でキャリア教育をするということの大切さを改めて感じたのですが、永井先生のおっしゃられたようなキャリア教育をすることで、学生に職業選択や職業観、あるいは就職活動に何らかの影響を及ぼした事例があればお聞かせいただけませんか。

また、日本女子大学で取り組んでいるセカンドキャリア支援の話も新鮮だったのですが、一般的には大学のキャリアセンターは大学の出口に関しては支援をするけれども、卒業後についてはほとんど関わらないという印象があります。セカンドキャリアという観点から、卒業生にどのようなかたちで支援をしているのか、またこうした取り組みを始めた経緯についてお聞かせください。

永井：

あまりいい事例ではないかもしれませんが、先ほどの優秀な学生の挫折の話で、こちらから見れば「どうしてこんなに優秀な学生を採ってくれないのかな」と思ったことがありまして、そのときにもう少し間口を広げて何かにつながっていく、自暴自棄になるのではなくて続けていくことで何とかなるよというようなことを言っていたら、福祉系なのでちょっと一般職とは違うのですけれど、卒業して2年後ぐらいに希望のところに転職することができたということがありました。

世の中では意外に転職が多いというのも学生さんはあまり知らないのですが、30代以降の転職と20代での転職は違うと思いますけれども、20代で自暴自棄にならないで転職というかたち、あるいは正規雇用が取れなかった学生についても何らかのかたちの正規雇用を狙うチャンスがあるのだということを伝えて、希望の芽を失わないようにさせるということは、一つの事例だけですが、できたかなというふうに思っています。

それと、先ほどのセカンドキャリアの話ですけれども、これはお金が取れたからというのたぶんあるのですが、女子大学の生き残り戦略というところが大きいと思います。女子大離れというのが底を打ったとも言われていますけれども、やはり昔とは違って女子大を避けて共学の方に行くという流れがずっとありまして、女子大は全般的に偏差値等がどんどん下がってきております。そこでセカンドキャリア自体は今のところは卒業生に限定しているわけではなく、他の大学卒業の方も受け入れているのですけれども、そういったセカンドキャリアまで面倒をみるといったような姿勢を打ち出して、女子大の魅力を高めたいというところで、大学の経営側の戦略というのものもあるかと思います。

実際には学生さんや卒業生とお話して出てきた問題点ではありますが、現実的にはそういうことです。

司会（六車）：

ありがとうございました。

ではすみませんが、時間が迫っておりますので、学部長からごあいさつをお願いしたいと思います。

照本学部長：

ほんとうはもっと質疑応答に時間を取りたいのですが、この後の永井先生のスケジュールが詰まっておりますので、これで中味の濃い講演会を終わりにしたいと思います。

最後に、私の個人的な感想のようなことを手短にお話しさせていただきます。

まず1番に、女性の働き方とか生き方を問うことは、その裏返しにある、男の働かされ方、生かさされ方を問うということなのだ、と改めて考えさせられました。

2点目は、私の専門は学校教育なんですが、先生のお話から、現実と乖離した「働き方」「結婚」「家族」の標準モデルを押し付けている学校教育の罪深さをひしひしと実感させられました。

3点目です。講演会のテーマ設定の趣旨にかかわりますが、私たちの学部は来年度初めての卒業生を送り出すことになります。そのため、学部内の関連委員会においてキャリア教育やキャリア支援をどうしていくかを検討してもらっています。また全学的にもキャリアセンターを中心にいろいろな部署に支援をお願いし、さまざまなサポートをいただいています。ご講演は、こうした取り組みをより一層充実・強化させていくことにつながる貴重な機会になりました。

永井先生のお話を聞きながら、幸福追求への見通しと申しますか、一人一人が幸福に生きることに繋がる働き方とか暮らし方というものを、どういうふうに女子学生・男子学生に考えさせ、実践させていくのか、そのために必要な知性や資源—先生は「リテラシー」と「ネットワーク」とおっしゃいましたけれど—、こうした卒業後も見据えた学生支援を大学組織としてどう追求していくのか、そういう課題を提示されたのだと理解しました。

今回は、例年になく教職員の方の参加が多いですね。学生さんは授業時間の都合で多く参加できず、とてももったいないことをしましたが、次年度以降もこうした内容の講演会を学生、とくに女子学生の就職支援やキャリア教育を充実させる方向で企画していきたいと思っています。

永井先生、本日はお忙しいところ、どうもありがとうございました。

司会（六車）：

最後に一言だけ。昨年度も、「FD・SD コンソーシアム名古屋」の行事記録として、経験交流会の内容をこのような冊子に収めさせていただいております。今年度も冊子を配布させていただきますので、改めて読んでいただけたらと思います。

今日はどうもありがとうございました。

（第2部終了）

付録

ライフコース・イメージに関するアンケート

★このアンケートは、貴校で開催される講演会の資料作成目的ならびに学術目的で実施いたします。実施にあたっては無記名で行い、集計した数値を公表いたしますので、個人のお考えが他人に漏れることはありませんので、ご協力のほど、お願いいたします。

日本女子大学 永井暁子

Q1 あなたの性別と学年をお教えてください。(あてはまるもの一つに○)

性別 1 男性 2 女性

学年 1 1年生 2 2年生 3 3年生 4 4年生

Q2 女性の方であれば自分が希望するライフコース、男性の方であれば配偶者に望むライフコースは、以下のうちどれに最も近いですか。(あてはまるもの一つに○)

- 1 結婚し、子どもを持ち、仕事を続ける
- 2 結婚し、子どもを持ち、仕事を持たない(専業主婦)
- 3 結婚し、子どもを持ち、子育てが一段落したら再就職する
- 4 結婚するが、子どもは持たず、仕事を続ける
- 5 結婚するが、子どもは持たず、仕事も持たない(専業主婦)
- 6 結婚するが、子どもは持たず、再就職する
- 7 結婚するつもりはない
- 8 その他 ()

Q3 では現実には、あなたは何歳で結婚していると思いますか。(あてはまるもの一つに○、カッコ内に数字を記入)

- 1 () 歳で結婚していると思う
- 2 結婚しないかもしれない/結婚しない

Q4 では現実には、あなたは何歳で子どもをもつと思いますか。(あてはまるもの一つに○、カッコ内に数字を記入)

- 1 () 歳で子どもをもつと思う
- 2 子どもをもたないかもしれない/子どもはもたない

Q5 では現実には、あなたは何人子どもをもつと思いますか。(あてはまるもの一つに○、カッコ内に数字を記入)

- 1 () 人、子どもをもつと思う
- 2 子どもをもたないかもしれない／子どもはもたない

Q6 では現実には、あなたは何歳で再就職すると思いますか。男性の方であれば配偶者に望むライフコースとしてお答えください。(あてはまるもの一つに○、カッコ内に数字を記入)

- 1 () 歳で再就職すると思う
- 2 仕事を辞める時期はない／いったん仕事を辞めたら、再就職はしない

Q7 では現実には、あなたは子どもが何歳で再就職すると思いますか。男性の方であれば配偶者に望むライフコースとしてお答えください。(あてはまるもの一つに○、カッコ内に数字を記入)

- 1 子どもが () 歳で再就職すると思う
- 2 仕事を辞める時期はない／いったん仕事を辞めたら、再就職はしない

Q8 あなたは住宅購入(マンション、一戸建てなど)をすると思いますか。するとしたら、何歳の時に購入すると思いますか。

- 1 住宅を () 歳で購入すると思う
- 2 住宅を購入しないと思う

アンケートはこれで終わりです。
ありがとうございました。